

日高龍雄氏が語る

カンチャナブリ 慰霊塔と父



日高龍雄〔Tatsuo Hidaka〕

日高洋行代表取締役会長。タイ国日本人会名誉会員。1940年、バンコク生まれ。父は日高洋行創業者である日高秋雄。終戦をタイで迎え、在留邦人とともに日本人収容所であるバーンブアトーン・キャンプに抑留され、キャンプ内の幼稚園に通う。46年、日高一家は神戸に引き揚げる。関西学院大学を卒業し証券会社に3年間勤務した後、バンコクで日高洋行を再興した父の仕事を手伝うために渡タイ。2014年在外公館長表彰受賞。

第2次世界大戦と慰霊塔

カンチャナブリ県のクウェー川にかかる鉄橋は、アカデミー賞受賞映画「戦場にかける橋」(1957年公開)で一躍有名になり、今も観光地として国内外から多くの人が訪れます。その鉄橋からほど近い場所に「カンチャナブリ慰霊塔」があることは、連合軍共同墓地や戦争博物館に比べると知られていないかもしれません。

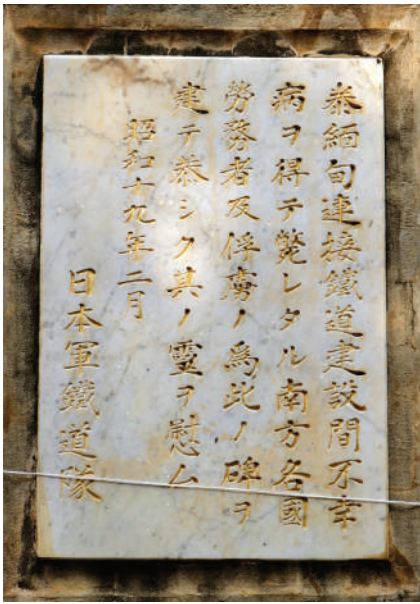
第2次世界大戦中の1942年に、インドのインパールを攻略するインパール作戦の軍需輸送鉄道として泰緬鉄道の建設が始まり、ほぼ1年で415キロ

の鉄道を突貫工事で完成させたのです。建設工事に従事した労働者の多くはアジア人労働者、そして連合軍捕虜でした。過酷な労働と劣悪な環境、食糧不足による栄養失調、熱帯感染症などでおびただしい数の死者が出ました。日本軍兵士と軍属も含め、そのすべての犠牲者を慰霊するために、日本軍の鉄道建設隊長高崎少将によって建てられたのが、カンチャナブリの慰霊塔です。

戦後長い間、顧みられることなく密林に埋もれたままになっていた慰霊塔を探し出し、タイ国日本人会が管理し供養する体制を整えたのが日高秋雄(とし



第2次世界大戦中に日本軍によって建設されたクウェー川鉄橋



慰霊塔の裏面の碑文。「泰緬甸連接鐵道建設間不幸病ヲ得テ斃レタル南方各國勞務者及俘虜ノ為此ノ碑ヲ建テ恭シク其ノ霊ヲ慰ム 昭和十九年二月 日本軍鐵道隊」

※一部の旧字体を新字体に置換



お)氏と小谷亀太郎氏(ともに故人)でした。

今年は2月18日に執り行われた恒例のカンチャナブリ慰霊塔法要にさきんじて、ご子息の龍雄さんに慰霊塔と父・秋雄さんのお話をうかがいました。

父・日高秋雄

— お父様はどんな方でしたか？
意志が強く、ひとのためなら何でもするという性格でした。しかし商売は下手だったですね。父は戦前にタイで日高洋行という会社を起こし、鉄を扱っ

ていました。マッカサン鉄道工場が出る鉄屑は、起業した当時、タイでは利用されていなくて無用のものだったのです。それを買い取って日本に輸出して大きくなった会社でした。

父は戦前から日本人会の仕事に深く関わり、役員や理事、副会長を歴任し、1939〜40年には日本人会会長を務めました。敗戦後、他の日本人と同様にバーングアトーン収容所に抑留され、すべての財産を没収された、日本に強制送還されたわけですが、1952年に再びタイ

カンチャナブリ慰霊塔。2月18日の法要で、内堀陽弘師(高野山真言宗金剛峯寺より派遣されているバンコクの日本人納骨堂堂守)が読経

に戻り会社を再興しています。

事業とは別に、荒廃していたアユタヤ日本人町の復興に力を入れ、水浸しだった神社跡を整備し道路を造り、石碑の建立に尽力しました。その後87年の日タイ修好100周年記念行事の一環としてアユタヤ歴史資料館が建設され今に至っています。

戦後途絶えていた日本人学校の再建にも奔走して、62年に在タイ日本国大使館付属小学校、72年には現在の泰日協会学校ができたわけです。

密林にのまれた慰霊塔を探す

さまざまな奉仕活動をしてい



冥福を祈る碑文が英語、マレー語、タミール語、中国語、ベトナム語、タイ語で刻まれ、慰霊塔を囲む塀に埋め込まれている

ますが、なかでも戦後すぐに取りかかり、とりわけ力を注いだのがカンチャナブリ慰霊塔でした。

この慰霊塔は1944年2月に鉄道建設隊長の高崎少将によって建てられました。マラリアやコレラなどの病気や栄養失調によって、1万人以上の連合軍捕虜、何万人ものアジア人労働者、それに軍属、日本兵も犠牲になりました。その人たちを慰霊するために建てたもので、土地は日本軍が賃借していました。

けれど、戦後はほとんどの日本人が強制送還され、そのために慰霊塔は放置されて、ジャングルにのみこまれてしまったのです。父は同じく戦前からバンコクで会社を経営していた。パシフィックアンドオリエントの小谷亀太郎さんとともに密林に分け入って探し、見つけ出し、修復しました。戦後支払うことのできなかつた期間の土地の賃借料を払い、そして日本政府からの資金援助を受けながら、日本人会が土地を5000バーツで買い取り、整地して、1963年に第1回法要を行いました。それから毎年、法要を続けています。

——タイに戻ってまず慰霊塔探しをしたのはなぜでしょうか？
先にお話ししたように父は鉄

を扱う仕事をしていました。そういうことで日本軍からの命令で泰緬鉄道建設に使う資材を調達して運んだのが父の会社・日高洋行だったのです。ですから父は、捕虜や労働者のおかれた悲惨な状況をつぶさに見て知っていました。だからなのです。

建設当時、シンガポールから調達した資材をマレー鉄道でバンコクまで運び、日本から届いた物資とともに会社の倉庫があったクルンテープ橋のたもととのタノントックから、はしけ200隻に積んでタグボートで引いてチャオプラヤ川を廻りました。その頃はダムがなかったの、カンチャナブリまで船で運ぶことができたと聞いています。

慰霊塔はなくてよかったもの

——次世代の人たちに伝えたいことは？

慰霊塔を苦勞して見つけ出してよかったと言う方もいますが、慰霊塔は本来なくてよかったものです。戦争がなければ造る必要がなかったのですから。今はロシアがウクライナに侵攻して戦争になっています。戦争は昔話ではないのです。私が若い世代の皆さんに言いたいのは

を扱う仕事をしています。そういうことで日本軍からの命令で泰緬鉄道建設に使う資材を調達して運んだのが父の会社・日高洋行だったのです。ですから父は、捕虜や労働者のおかれた悲惨な状況をつぶさに見て知っていました。だからなのです。



(上)タイの僧侶による供養も併せて行われる (左)2月18日の法要には日高さんをはじめ、多くの方が参列した

は、戦争は絶対にしてはいけないということ。
慰霊塔を建てる必要のない世界であってほしいと切に願っています。

——ありがとうございます。
ございました。



【日本人会から】

カンチャナブリ慰霊塔の法要を毎年2月に行っており、どなたでも参列できます。事前にお知らせいたしますので、ぜひご参加ください。

タイ 彩発見！



学校だより

小学6年生の
カンチャナブリ
修学旅行

遠隔地への修学旅行は3年ぶり。行き先はカンチャナブリ。第2次世界大戦中に、日本軍の鉄道建設工事に従事して亡くなった捕虜や労働者を慰霊する塔のこと、ミャンマーからの移民や少数民族のことなどを、生徒たちはしっかりと事前学習して、その日を迎えました。

バンコク日本人学校6年部教諭 櫻木美那

修学旅行でカンチャナブリへ

令和4年(2022)12月、本校で約3年ぶりにバンコク都外への修学旅行を実施することができました。

今年度は、感染症対策を講じながら、子どもたちは、学習する中で運動会や合唱発表会などの行事を行ってきました。そのような中、新学期初めから「修学旅行に行けるのかな」「今年度はどこに行くのだろう」と心待ちにしている子どもたちが多くいました。

実施時期や実施場所の検討を重ね、「協働して課題を解決する力の育成」「社会参画意識と道徳的実践態度の向上」「異文化理解の向上」をねらいとし、2学期にカンチャナブリへの修学旅行を実施することに決まりました。「修学旅行の中で人間関係を深めたり、自分の役割を果たしたりするなど、集団生活の楽しさを味わってほしい」「タイの文化や歴史を学ぶことを通して、タイのことをよりよく理解し、日本や世界とのつながりを感じてほしい」というのが

私たち職員員の願いでした。そこで、「タイ彩発見！」と新しきタイを学び、伝えることをテーマに修学旅行に向けて学習を始めることにしました。

修学旅行でカンチャナブリに行くことを知ったときの子どもたちの反応は、「修学旅行に行けるんだ！」「カンチャナブリ行ったことある！」「初めて行くから楽しみ！」など様々でした。たくさん学び、最高の思い出を作るために「タイ彩発見！」がスタートしました。

事前の学習で準備万端

6年生の子どもたちは、1学期から総合的な学習の時間に日本とタイの関係やタイのSDGsへの取り組みについて調べてきました。これまでの学習の中で感じたタイのよさを再確認したり、課題について考えたりするために、子どもたちは修学旅行の行き先であるカンチャナブリについても調べ学習を始めました。



カンチャナブリ
慰霊塔(上・下)



カンチャナブリ慰霊塔

修学旅行でのおもな見学先

- ワットプラパトムチエディ
- ワットタムスア
- ヘルファイアパス
- 泰緬鉄道
- 戦争博物館
- カンチャナブリ慰霊塔
- バンポンカ
- サファリパーク

修学旅行の主な見学先について調べる中で、タイの文化や歴史についての新しい発見や疑問点、もっと知りたいことが見つかりました。さらに、子どもたちがタイやカンチャナブリについてより詳しく知り、修学旅行での学びを深められるようにタイ国日本人会やJICAタイ事務所の方々が力を貸してくださいました。

タイ国日本人会「カンチャナブリ慰霊塔」について

カンチャナブリ慰霊塔は、建設工事に従事した連合国軍捕虜・労働者・軍属を慰霊するため、鉄道建設隊長であった高崎少将によって建設されました。戦後長らく放置され、所在すら不明になっていましたが、1960年頃にタイ国日本人会が土地を購入し、維持管理を行って

います。維持管理に長く関わっておられる日高龍雄さん、日高泰雄さんにご来校いただき、事前学習を実施しました。いざ事前学習が始まると、子どもたちは、興味深く日高さんの話を聞いていました。戦争中の様子や慰霊塔が建てられ、発見されたときの状況など、新しく知ることへの驚きも多かったようです。「もっと知りたい!」と日高さんに質問をする子どもも多く、貴重な時間となりました。その時に書いた子どもたちの感想を一部紹介します。

児童の感想より

◆講演会が始まる前は、カンチャナブリについてけっこう知っているつもりだった。行ったことがあったからだ。しかし、いざ始めると全く知らないことがたくさんあった。慰霊塔がジャングルにあったこと、その土地は5000バーツであったこと

などを夢中でメモした。この講演会で知ったことや修学旅行で学んだことを後の世代にも伝えていきたい。

◆インパール作戦が泰緬鉄道に關係していることや、慰霊塔の土地が5000バーツで手に入れたことなど、ネットで調べただけでは分からないことをたくさん知ることができた。

また、話を聞いてそれほど多くの外国人の人々が亡くなり、苦しんだんだということが改めて分かった。タイに住んでいるということはとても貴重な経験だということや様々な文化に触れていることが大切だと感じた。これからはもっとタイの文化を大切にしていきたい。

◆カンチャナブリの戦争博物館を一度訪れたことがあったけれど、詳しい歴史を知らなかったため、日高さんの話を聞いて深く知ることができた。同じことを繰り返さないように、伝えていくのも私たちの世代だと思っただ。希少な外国での生活で、タイのことを知る第一歩になったと思う。

JICAタイ事務所「バンポンカについて」

バンポンカは、車で1時間

ほど西に走るとミャンマーの国境が近くにある、ミャンマーからの移民や少数民族も住んでいる村です。建築、食事、衣装等、タイではあま



も多く見られます。タイでは、約6000の村で一村一品運動が展開されており、バンポンカはその運動を行っている村の一つです。タイの取り組みを支援しているJICAタイ事務所の方々に協力していただき、JICAとタイとの関わりやバンポンカについて知るための事前学習を実施しました。

児童の感想より

◆バンポンカをより充実させるために何ができるかをグループで話し合い、温泉を利用したり竹を使ったものを作って売ったりするなど、バンポンカならではの自然を生かすものがあるのかなと思った。バンコクとはまたちがうカンチャナブリに

あるこの村で、文化を大切に、タイらしさを知ってもらえるようになればいいと思う。

グループでOTOP (One Tambon One Project) タイの一村一品運動) を考えたことよってバンブオンカへの興味がわき、楽しく勉強できた。JICAさんのやっていることを教えてもらったときに、身の回りのものと関わっていることを知って、驚いた。

今日の学習で、自分が知らなかったようなことを知ることができたし、日本でどのような取り組みが行われているのか、そしてそれがタイにどのように関わっているのかを知ることができた。修学旅行では、今回学んだことや調べているSDGsの取り組みを活かした活動をできるようにしたい。

いよいよ修学旅行へ！



バンブオンカで民族舞踊鑑賞

令和4年(2022)12月7日、ついに出発当日を迎えました。カンチャナブリへ向かうバスの中は、担当の子を中心に準備してき

たバスレクで大盛り上がり！クイズをしたり、歌を歌ったりと学級の時間を楽しむ子どもたちの姿に、修学旅行を実施できてよかったと職員一同早くも感じていました。

1日目は、ワットプラパトムチェディ、ワットタムスア、戦争博物館、カンチャナブリ慰霊塔の4カ所を見学しました。ワットプラパトムチェディで世界一高い仏塔の大きさに圧倒され、ワットタムスアでは、タイの文化を体験し、美しい風景に子どもたちは目を輝かせていました。戦争博物館では、真剣な表情で展示を見たり、添乗員や職員に質問をしたりし、子どもたちは自分なりに平和について考えている様子でした。カンチャナブリ慰霊塔では、代表児童の「これからも世界の平和を祈り続けましょう」という言葉とともに、献花と黙とうを行いました。事前に日高さんからカンチャナブリの慰霊塔についての話を聞いていたこともあり、子どもたちの行動や言葉に重みを感じられました。

2日目はヘルファイアパス、バンブオンカ、サファリパークを見学しました。ヘルファイアパスでは、岩場を手作業で切り拓いて線路が開通された場所を見学しました。バンブオンカ

では、タイの文化を体験しました。パンダンフラワー、プラータピアン、ドライバンブー作りをしたり、村の方々の伝統舞踊を見たりし、現地の方々の交流を楽しみました。サファリパークでは、ショーやトラムツアーで盛り上がりました。

3日目は、学級ごとに作成したクイズを使ってオリエンテーリングを行った後、泰緬鉄道に乗り乗るために、カンチャナブリ駅へ向かいました。岩壁すれすれを走りながら、子どもたちはその絶景に釘付けになっていました。また、泰緬鉄道の様子を写真で見ている子どもたちも実際に乗車したことにより、当時の鉄道建設の難しさを改めて肌で感じているようでした。

事前学習や3日間の修学旅行を通して、子どもたちは多くのことを吸収することができたように思います。ワクワク、キラキラとした表情で友達と一緒に学びを深め、みんなが楽しめる修学旅行を創ろうとする姿に子どもたちの成長を感じました。それは、事前学習や修学旅行への保護者の方々や関係機関の方々のご理解やご協力があつたからこそです。改めて感謝申し上げます。

タイ彩発見！

修学旅行を終えた子どもたちは、修学旅行を通して実際に目で見て感じ「彩発見」したタイの魅力やバンコク日本人学校の他の学年の子供たちや保護者の方々、外部の方々に伝えようと、修学旅行で行った場所のパンフレット作りを開始しました。パンフレットに加え、インターネットを使った発信方法を考えている子どもたちもいます。1月末現在、学校外にもご協力をいただき、誰に何をどのように伝えるか、葛藤しながら活動を進めているところです。学んだことや考えたことを周りの人々に発信し、子どもたちが社会の一員としてさらに成長していくことを願い、私たち職員一同サポートしていきます。バンコク日本人学校やタイの街の中で6年生の子どもたちが発信したパンフレットを見かけた際には、ぜひご覧いただき、子どもたちの「タイ彩発見」をお楽しみください。

ワットタムスア



きっかけは タイ vol.20

タイから繋がるライフストーリー

昨年12月～今年1月までサイアム高島屋で開催された個展 It is Wonderful to be Alive から

阿部恭子さん ◆アーティスト

絵を描きたい

子どもたちが

安心して描ける

社会を作りたい。

— タイとの出会いは？

デザイン事務所に勤めていた頃にトムヤムクンを食べて、こんなにおいしいなら本場で食べてみたいとタイに飛んだのが始まりです。懐かしい匂いがして、肌に合うというか、初めての国とは思えませんでした。

独立してイラストレーターになってからは毎月通うようになり、まるでタイに行くために働いているような状態に。そのうちタイ政府観光庁などから仕事をいただくようになり、繋がりがより強くなっていきました。

— 移住の経緯は？

最初のときからいつか絶対に住みたいと思っていたし、頻繁に来るようになっていたので、タイ語のレッスンを始めたのですが、その先生の友達として知り合ったのが当時留学していた

現在の夫です。私から「結婚してください」とアタックして、1996年に移住しました。

— タイで仕事はどのように？

当初は日本から持ってきた仕事のイラストを描いていましたが、タイ国内でも受注できるように営業してみました。それでわかったのは、当時のタイにはイラストレーターという職業がないことでした。職業として認識されていたのは漫画家か画家でした。

企業に就職したこともありましたが1カ月ももちませんでした。絵を描けないことが息がでないくらい辛かった。画家になることに決め、1年後に個展を開きました。同じ頃お絵描き教室を始め子どもたちに教えるようになり、作品制作、個展、教室を仕事としてきました。

アーティスト

阿部恭子お絵描き教室主宰



こすもす公園の「希望の壁画」の前で。左から壁を貸した佐々木社長、阿部恭子さん、公園オーナーの藤井さん夫妻※

震災後、釜石こすもす公園で「希望の壁画」制作

— 東日本大震災で被災した釜石の公園に壁画を描かないかと打診されたことでした。津波

で大きな被害の出た釜石では、公園や空地に仮設住宅が建てられ、子どもたちの遊び場がなくなってしまったのです。そこで藤井さんという方が、ご自分の畑にこすもす公園を作りました。震災の翌年に完成したのですが、公園の前に大きな工場があって、その灰色の壁が津波に見えると言って泣く子がいたことから、工場の壁に絵を描くことになったのです。

初めてこすもす公園を訪ねたのは2013年の3月でした。



上：White Canvasの活動で僻地の学校で絵画指導※ 右：手にしている絵は孤児施設で買い上げた子どもの作品

Kyoko Abe

1967年大分県生まれ。デザイン事務所勤務を経てイラストレーターに。タイ人の伴侶を得て96年にタイ移住。97年、小学館「おひさま大賞」受賞。東日本大震災で被災した岩手県釜石市のこすもす公園に2013年、ボランティアとともに「希望の壁画」制作。その制作過程を元に16年、絵本『あしたが好き』出版。20年、White Canvas プロジェクトに参画。作品制作・個展のかたわら「阿部恭子お絵描き教室」主宰。

被災地を巡り、仮設に暮らす人たちと話して、市役所にも行きな出来事ではなく未来の話をするのです。だから私は明るい希望の絵にしようと決めました。

— 巨大な壁画だそうですね。

幅43メートル、高さ8メートルです。大きくても縮尺の問題なので、勇気があればどうということはありませんが、困ったのは知らされていた比率と違ったこと。それにトタン製で波打っているのが、真っ直ぐに見えるように描くのが大変でした。

地元の人たちがボランティアで手伝ってくれるのですが、みなさん絵は素人なので、人数が増えるほど私の朝が早くなりました。その日の絵の具を人数分作らなければならぬので。「手伝ってあげているんだ」と

【SDGs×アート】WhiteCanvasプロジェクトってなに？



Q あなたにとってタイとは？

「いっしょに 夢を叶える ところ」



か「よそから来た人に何がわかるのか」という声も聞こえてきたし、お互いに理解できなくてもめることもありましたが、ケンカするほど仲良くなりました。被災者でもあるボランティアの人は、絵を描くことに集中することで辛い出来事を忘れられた面もあると思います。タイから7回通って、1年間で描き上げました。ボランティアは延べ500人です。宿泊場所から公園までの間に踏切があって、毎日絵の具を持っていきその線路を踏みながら歩いていきました。

一秒一秒が大切な時間で、それが絵に出ています。壁画は長い時間をかけてみんなで作ったので、みんなの人生の一部が反映されています。たった1年でも最初と最後では全然違って、終盤はみんなの熱意が高まって壁画にかぶりついていました。技術も気持ちも変わっていききました。私にとっても今となっては宝ですし、何物にも代え難い出来事です。

絵を描きたい子どもたちが安心して描ける社会に

— White Canvasとは？
2020年にカンボジア、スリランカ、タイで始まった絵画アワードで、アジアのアーティスト発掘のために力を尽くそうと、日本の東方文化支援財団が立ち上げたプロジェクトです。絵を描きたいのに描く環境がない貧しい子どもたちにとって、

絵は道楽と見られてしまい、才能の芽が摘まれてしまいます。描きたい子どもが安心して絵を描ける社会を作りたいのです。具体的には年に1回コンテストを開催して、入賞作品にはICタグ付きの証明書を添付して、作品が売買されるたびに一定金額がアーティスト本人に還元されるという新しい仕組みをとっています。

— 画用紙さえ買えない環境の子どもいますから画期的ですね。

たとえわずかな金額でも意味があります。私はアートの可能性を伝えたいのです。絵は道楽ではなくて仕事に結びつくことを親にも知ってもらいたいです。たとえば昆虫の絵を描くのが好きな子がいたら、アウトドアグッズや虫除け製品の企業と繋ぐ。子どもとバンクオクの企業の間に関わりができればいいかな展開があり得るでしょう。

White Canvasではスポンサーを探しています。子どもの人生に関わることでできるこのプロジェクトに協力して下さる企業・団体を募集しています。活動資金でも画材の寄付でも、絵を飾る場所の提供でも何でも歓迎です。みんながアジアの子どもたちを育てていきたい。その理念に賛同して下さる企業の方と繋がりたいです。私にできるのはアートのことだけ。駆け出しのアーティストだった頃、私自身がしてほしいと思ったことをすべてやりました。そう思っています。

— ありがとうございます。

